

市では、地域全体で青少年の健全育成に対する理解を深め、取り組みを広めることを目的に、毎年、青少年健全育成市民大会で事例発表を行っています。令和3年度代表の中学生・高校生の発表を紹介いたします。

礼に始まり、 礼に終わる

稲沢高等学校3年
橋本 和希



「柔道は、礼に始まり、礼に終わる、これをしっかりとできる人間が強くなる。」この言葉は私が高校3年間、所属していた柔道部の顧問の先生に言われた言葉です。私は中学まで文化部に所属していましたが、高校では「強くなりたーい！」と思い、思い切って柔道部に入部しました。

柔道の練習では相手と組み合う前後で必ず「お願いします。」「ありがとうございました。」と声を発して、礼を行います。入部して間もないころまでは私は訳も分からず、先輩たちの真似をして何となく礼をしていました。ある日、顧問の先生が、柔道の礼法は相手の人格を尊重し、敬意を表す表現であること、日々の練習の中で繰り返し行う礼法を通して、「礼の精神を養うこと」について話されました。その時、言われた言葉が冒頭の言葉です。この言葉を聞いた私は深く感銘を受け、今でも頭の中に残っています。それから、私は意識して礼法を行うようにしました。また、礼法をしっかりとできる人こそ強く、カッコよく見えました。礼法を正しく行い、「礼の精神」を身に付けることはその人間性を成長させ、人を惹きつける何かがあると思います。これは柔道だけではなく、日常生活においても同じであると考えています。私は日常生活における礼法は「挨拶」であると考えています。「挨拶をしたほうがよい。」ほとんどの人がこう思っているだろうし、私もその一人です。せっかくの機会なので、私は「挨拶」の効果や役割などについて深く考えてみることにしました。

そのため私は毎日教室に入ってくる友人全員に元気な声で「おはよう！」と声をかけてみました。その結果、挨拶は相手に与える自分の印象を大きく決定すること、気持ちの良い挨拶には必要な要素があることに改めて気づきました。毎朝の私の「おはよう！」に対して、きちんと返してくれた人、声は小さいけど返してくれた人、会釈だけの人、返事がない人、など反応は様々でした。当然、挨拶をして気持ちよくなったのは、きちんと返してくれた人です。また、少し嫌な気持ちが残ってしまったのは、返事がない人でした。次に、それ以外の返し方の人に注目してみました。小さい声で挨拶を返してくれた人は、元気がない、とりあえず挨拶をする、そんな感じに見えました。また会釈だけの人は、声を出すのがタルい、面倒くさい、という印象を持ちました。反対に、きちんと挨拶をする人は、クラスを中心人物であることが多く、心に余裕があるような印象を受け、こちらの気持ちも明るくなると感じました。

この結果から、挨拶の仕方によって、その人の印象を左右してしまうことに気が付きました。挨拶の仕方だけで、その人のイメージ、コミュニケーション力などを読み取ることができました。そして、気持ちのよい挨拶に共通する3つの要素を見つけました。それは、相手の目を見る、笑顔、元気の3つです。この3つの要素すべてを含んだ挨拶を当たり前に行うことができる人が、皆のモチベーションを上げたり、団結力を向上させ、皆を導く存在だと思いました。これらすべては、感謝の言葉「ありがとう」も同じだと思います。私は挨拶について考えることで、挨拶のイメージが以前と比べてかなり変わりました。日常生活の中で当たり前にある「挨拶」は周囲にいる人達の気持ちに働きかけ、環境を変える力を持っていると感じました。

これから私は社会に出て、大人になっていきます。柔道で培った「礼の精神」はどんな環境でも通用すると思っています。「礼に始まり、礼に終わる。」相手を尊重し、敬意を表す「挨拶」をすることによって、よりよい社会が作れるよう貢献していきたいと考えています。

文化はつなぐ

平和中学校3年

山田 稜悟



「はしつせー。よーいやなー。」これは、平和町で唄われている「木遣音頭」の一節です。木遣音頭は、多人数で重い木材を運ぶときに唄われていました。平和町で唄われている木遣音頭は、加藤清正が名古屋城を構築した際に提唱した音頭を、法立の近藤崑七が習い覚えたものを伝授し、広まったと言われています。

法立小学校の児童は、4年生の「総合的な学習の時間」に木遣音頭を学ぶことになっています。木遣音頭の練習は、小学校の先生だけでなく、地域の木遣音頭保存会の方から直接教えていただくこともありました。僕も木遣音頭を一生懸命に練習し、いろいろな場で発表しました。名古屋文理大学文化フォーラムで行われたグリーンコンサートでも披露しました。とても緊張しましたが、終わったときには、拍手をたくさんいただきました。平和まつりでは、それまでお世話になった木遣音頭保存会の方々と共演しました。地域の伝統を、僕たちの手をつなげているという実感が湧きました。

僕は木遣音頭の発表の中で司会を務めました。司会は歌詞だけでなく、冒頭のセリフなど覚えることがたくさんあって大変でしたが、その分、気が引き締まりました。お客さんによく聞こえるように、大きな声で歌ったり音の高低を意識したりしました。発表が終わったときは、すごく達成感を感じるとともに、言葉にできない感情がありました。文化は、地域を盛り上げるとともに、人の心を豊かにしてくれる力があると思います。

小学校5年生になり、僕は「稲沢文化財愛護少年団」に入団しました。稲沢文化財愛護少年団は、稲沢市の歴史を学び、文化財を守るうとする小学生、中学生の集まりです。愛知県で最初の文化財愛護少年団で、今年度で46年目

を迎えました。初めは分からないことが多く、不安がたくさんありましたが、愛護少年団の先生やOBの方々が優しく接してくれました。すぐに慣れることができました。時々、「建物の柱を見れば、その建物がだいたいどの時代に建てられたか分かる」など、歴史について興味深い話をしてくださる先生もいました。

愛護少年団の活動の中で僕が一番楽しいと思ったのは、勾玉づくりです。勾玉は2千年以上も前から「魔除け」として、石で作られていたものです。削る前の石は直方体なのですが、サンドペーパーで削るとだんだん丸みのある形になってきます。その後、目の細かいペーパーを使って、水の中で削って仕上げます。集中しすぎて、終了時刻を過ぎて夢中で取り組んだ覚えがあります。ツルツルになったときの勾玉は、感動を覚えるほどに光り輝いていました。

愛護少年団の団員は、僕が入団したときは63人でしたが、昨年度は28人まで減少してしまいました。愛護少年団の活動は、学校で教科書を使って学ぶことは違い、勾玉や織物を作ったり、火打ち石で火を起こしたりするなど、文化に直接触れることができます。こうした活動がきっかけとなって、僕たちのような若い世代が文化を継承していくことにつながっていくと思います。また、愛護少年団の活動は、他の学校の友達や先生方とも交流することができ貴重な機会になります。新型コロナウイルスの感染が早く収まって、以前のようにたくさんさんの団員で、いろいろな活動ができる日が来ることを心待ちにしています。

僕は木遣音頭や愛護少年団などの活動を通じて、郷土を愛する心、協調性や社会性など、たくさんのおこを身に付けることができました。法立小学校の4年生には、これからも木遣音頭という伝統を受け継いでもらって、稲沢市が日本に誇る文化を、ずっとつないでいてほしいです。また、愛護少年団をきっかけに、僕のように歴史に興味を持ち、地域や日本がもつ素晴らしい文化を守り、さらに発展させていく人が増えていくことを願っています。これからも、人をつなぎ、地域をつなぎ、時代をつなぐ架け橋になる文化を、僕は大切にしていきたいと思っています。